



中国按摩推拿医学に関する基礎的研究及び日本近世 按摩術の形成について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 強 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017268

大阪府立大学博士（人間科学）学位論文

中国按摩推拿医学に関する基礎的研究及び

日本近世按摩術の形成について

論文要旨

李 強

2021 年 1 月

本論文は中国按摩推拿医学とは何かということを解明し、ならびにその日本近世按摩術の形成に及ぼした影響に関して研究するものである。

古代には「按摩」(『黄帝内経靈枢』九鍼論)、「按蹻」(『黄帝内経素問』異法方宜論)、「喬摩」(『黄帝内経靈枢』病伝篇)などの名称が存在していた。「推拿」という名称が最初に現れたのは明代である。

中国按摩推拿医学は日本の按摩術の源であると考えられる。遣隋使と遣唐使の制度化及び唐代医事行政制度の導入につれて中国の按摩術は日本に導入された。典藥寮に按摩博士という官位があることがその証左である。『養老医疾令』によれば、古代の按摩博士の職掌には次のような内容が記される。すなわち、按摩法、導引法、正骨法と固定法を用いて教授すること、治療範囲には、慢性疾患の「八疾」と急性疾患の「損傷折跌」があること、治療手段には按摩・固定・正骨・導引と瀉血などがあることなどである。

本論文は各々の章の先頭に、中国と日本側の先行研究を紹介する。訓詁学及び文献書誌学の研究手法を用い、中国按摩推拿の歴史や名称を古典文献のなかに考察し、中日両国の古代按摩療法の文献資料を比較して検討する。さらに江戸時代に勃興した日本按摩術の淵藪に関わる史実に基づいて、中国按摩術が日本按摩術の形成期にどのように影響を及ぼしたかを考証する。

本論文は以下の5章から構成されている。

第1章(序章) 本章は、まず、中国按摩推拿医学の定義、関連する各種専門用語の説明を行った。また、中国按摩推拿医学を理解し易くために、その歴史の流れを要約して紹介した。ついで、先行研究を踏まえ、中国按摩推拿医学が海外との交流の史実を考証し、特に按摩と **Massage** の語源の関連性について、多様な角度から検討し、独自の見解を示した。さらに、中国古代按摩推拿医学が日本の按摩術の源流とするという自説を用い、関連した史実を挙げ、議論を展開した。

第2章 訓詁学・文献学考証手法を用いて、按摩に関わる甲骨文字、導引、巫術・鑿術、俞拊、按摩とその別称である折枝、眦撼、按摩、按摩、橋引、矯摩、按蹻、喬摩、摩挲について詳細な考察を行い、新たな知見を得た。また多くの医家・道家・釈家の文献目録からすでに散佚した按摩著作の著録を抽出してまとめた。なお、下記のような幾つかの研究結果を示した。まず、手で人の疾病を癒す按摩療法は人類最古の医術であると考え、「老子が按摩法を創始した」説を検証した。そのうえで、按摩と道家・釈家との関係を理解するために、この説は無視できないとの結論を導き出した。また、上古時代の按摩医である

俞拊や按摩の別称について、先行研究に比して、広範で精密な考証を行った。特に「折枝」は、『孟子』の趙岐の注に「按摩なり」とされているが、「むしろ、導引の意味に近い」という説をたてた。さらに、按摩に関する用語を字ごとに考証を行い、按摩にまつわる用語について新しい見解を得た。最後に、宋の『聖濟総録』に述べられた按摩の治効理論を分析して、按摩を細分化した学問的意義を考察した。

第3章 まず、「推」と「拿」の二文字に対して訓詁学的な考証を行った。その結果「按摩」の「按」の意味は「おす」だけではないと結論づけた。また「搦」は、すなわち「拏」であり、「拿」はその俗字である。「搦」の意味は「かるくおさえる」ということから、推拿の「拿」は「推」と同じ、「おす」という意味であるとした。また、古籍の中の推拿という用語に関する記載をまとめ、三種類の定義があることを指摘した。1. 拿法はすなわち掐法或いは揉法であること。2. 按法はすなわち拿法であり、その按法は拇指直接法と屈指按法、手掌按法とに分けられる。両指の対合按法は掴む要素が入っているため、現代の「拿」の字義に近い。3. 正骨推拿としての拿法は、「捏定」と定義されている、「掴^{つか}む」の意味が含まれていること、の三種類である。

一方、11種類の重要な小児推拿の専門書について、先行研究とは異なった観点から考察し、新たな課題を見つけ、考証を行った。とくに『医門秘旨』について、これまで中国国内の学界では解明されていなかった流布ルートを検討した。日本の学者の知見に照らすと、『医門秘旨』は福建の同安張氏恒徳堂で版木が作られ、朝鮮半島で復刻されたと考えている。本来、李氏朝鮮「奎章閣」の蔵書であった。「日韓併合」の際に日本に移され、宮内庁書陵部に保管されるようになった。ゆえに中国国内の目録書に著録さえも存在しなかったのである。なお、「続修四庫全書」に収載されている、清の『小児推拿広意』の刊行年について、「1676年」という江静波の説に賛同しながら、それを支える文献上のエビデンスを補足し、陳世凱という人物を考証したうえ、刊行年代は1677年の可能性が大であるとの認識を示した。

『診病奇咳』は多紀元堅による著とされ、1843年に刊行された。弟子の松井操によって漢訳され、1888年に『診病奇咳』漢訳本は清国公使館出入りの商人王仁乾が日本で鉛印して、中国で刊行された。この章においては、清の『釐正按摩要術』（1888年）「按胸腹」の中「按腹法」という章節が『診病奇咳』漢訳本に由来したことを考証し、江戸時代に興起した日本漢方医学の腹診法が中国の小児推拿との関わりについて考察した。

第4章 日本は唐律令中の『永徽令』（651年）を全面的に模倣し、大宝元年（701年）

と天平宝字元年（757 年）に『大宝律令』と『養老律令』を諸国に頒布した。この二つの律令の中に医薬役職法令「医疾令」がある。一方、遣隋使と遣唐使の派遣および唐代医事行政制度が日本に導入された過程のなかで中国按摩術は日本に定着した。飛鳥・平安時代に設けられた典薬寮の按摩博士の官職はその一例である。このため、中国按摩術は日本の按摩術の嚆矢となる。

江戸時代の早期の按摩専門書は、ほかの鍼灸療法や湯液療法と同様、実は中国の按摩に関する書物を翻案して記したものであるかと考えている。しかし、それを確かめる術はない。なぜなら、中国本土においては、明末清初までに按摩または推拿には成人の治療を記した専門書は一冊も現れず、比較することはできないからである。本章は、中国で伝承の脈絡を失った古代按摩術の一部が日本の古代の按摩専門書に現存しているかを検証することを研究の目的とする。

日本の近世按摩術の形成においては、日本の正骨術の形成期の歴史過程に非常に似ていて、中医按摩推拿の理論と実践の体系の影響を受けたことは間違いないと考えられる。江戸時代中期以降、林正且が中国から伝わってきた導引養生・按摩法をまとめて『導引体要』を著した。これは日本の按摩術が産声をあげたという証拠とみなされる。その以降、宮脇仲策『導引口訣鈔』、藤林良伯『按摩手引』及び太田晋斎『按腹図解』が続々と誕生した。これらの書物は中医学理論や按摩の技を伝える翻案書だけでなく、日本の按摩術が迅速に成長期ないし勃興期に入った証拠ともいえる。本章は中国按摩と日本按摩の両者の淵源関係を考証し、上記の按摩専門書及び『五雲子腹診法』などの諸書の中に記載された按摩法は、非常に臨床価値があると同時に中国按摩推拿医学史に欠如した文献や手技の補充に大いに期待できると結論づけた。

一方、日本古代按摩の「曲手」手技の中の「車手」、「突手」、「挫手」と「横手」などは、按摩手技の面から見れば、中国推拿の最大の流派である一指禅推拿の滾法・揉法こんぼう んぼうとの類似性が高いことに見出し、両者の関係性を検証した。「車手」の動作の要領は、食指・中指・無名指・小指の指端で人体表面に接触する同時に、各指の遠位指節間関節と近位指節間関節が逐次に弯曲し、各手指が人体の上に滾ころがりながら、移動する。よく筋肉が豊富のところにおいて施術する。このリズムがよく反復的に行われる動作は、『金瓶梅詞話』の中の「木滾子」と『恆恆老言』の中の「太平車」のころがりにとても似ている。「車手」の名称は「太平車」を語源とすることを推測している。江戸後期に形成した日本古代按摩術は当時の中国按摩推拿術を忠実に継承・発展していたこと、きちんとした文字的な記載が残っている

ことが実証された。

第5章（終章） 前述した内容・結果を要約した上で、残された研究課題と今後の研究の方向性について述べた。

本論文において、古代における中国按摩推拿医学が日本の按摩術の形成に決定的な影響を及ぼしたことを確認することができた。

中国明清時代に流行していた按摩推拿手技は京都、大阪、江戸の一带に導入され、江戸期に勃興した日本按摩術の一部となっていると考証し確認した。明清時代の按摩推拿手技や学理において、中国ではつとに伝承が絶えたが、幸いにして日本に伝わり、日本の伝統医学の中に長い間にわたって保持された。これに対して、文献資料だけでなく、文物資料やフィールド調査（按摩師の口伝、流派の流伝など）を加え、これから、多方面の研究を重ねて行うことも今後の課題である。

一方、中国の隋唐時代から宋元明時代まで、つまり日本の江戸中期あたりまでは、医学専門書を通して中医学は日本の漢方医学に一方的に影響を与えていた。しかしその後、日本の漢方医学が学問においては台頭するようになった。その結果、江戸末期、明治初期において、日本に珍藏されていた中国古代医学文献が、さまざまな形で中国に還流することとなった。多くの書籍は中国では、すでに散佚していたからである。本論文ではそれらの関係を考証し、日本漢方医学がいかに明清時代の中医学の発展に貢献したかということの経緯を検証したが、この課題についても、今後のさらなる研究の目標としたい。